

# 価値ある活動を創り出す生活科授業の創造 —第1学年「大すき ヤギさん」についての考察—

永野 優希 [鹿児島大学教育学部附属小学校]

Creation of life classes to create valuable activities: A study of the 1st grade “Daisuki Yagisan”

NAGANO Yuki

キーワード：気付き、対象にかかわる活動、伝え合う・振り返る活動、中型動物の飼育活動

## 1. はじめに

生活科は、経験主義教育論「為すことによって学ぶ」を大切にした教科である。平成29年度改訂学習指導要領(文部科学省, 2018a;2018b)が示す教科目標にも、「具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を育成する」とあり、生活科創設期から一貫して、活動や体験を通じた学びが重視されていることが分かる。

しかし、その一方で、「這い回る経験主義」「活動あって学びなし」と揶揄されてしまう授業実践も少なくないと言える。そこには、活動すること自体が目的となり、活動することの意味や価値を子ども自身が実感できないままに単元が終わってしまい、自分にとって価値ある活動を主体的に創り出しながら、自身の生活をより豊かで楽しいものにしていこうとする姿を十分に引き出せていないという実態があるからだと考える。

このような現状を踏まえると、生活科の真の学びを成立させるためには、子どもが活動の意味や価値を実感し、自ら価値ある活動を創り出すことができる生活科授業を創造していくことが必要である。そこで、価値ある活動を創り出す生活科授業創造のあり方について、第1学年単元「大すきヤギさん」の実践を通して検証していくこととする。

## 2. 価値ある活動を創り出す生活科授業創造の考え方

### 2.1. 価値ある活動を創り出す生活科授業とは

生活科の授業とは、子どもが自己の思いや願いの実現に向かい、その思いや願いを連続・発展させながら、対象に直接かかわる活動や自分の体験を伝えたり振り返ったりする活動といった思いや願いの実現に向けた活動を繰り返す中で、対象や自分自身への気付きを深め、自分にとって楽しく豊かな生活を送るための資質・能力を育んでいく時間である。思いや願いの実現に向けた活動とは、対象のよさを捉え、身の回りの「ひと・もの・こと」と自分とのつながりを実感することができるとともに、自分自身のよさを捉え、自分自身を成長させることができる、子どもにとって価値ある活動だと言える。この価値ある活動を創り出す原動力は、対象に対する思いや願いであり、その思

いや願いは、対象や自分自身に対する気付きから生まれるものである。つまり、思いや願いと活動とは、思いや願いをもつことで活動が生み出され、そして、活動することで新たな思いや願いが生み出されるという、相互作用をもった関係である。また、対象にかかわる活動と伝え合う・振り返る活動との往還の中で対象や自分自身に対する気付きの質が高まることで、活動することの意味や価値を実感し、自分の学習や生活への自信や意欲を高め、主体的に自己実現に向かう姿が生まれるものとする。

ここまですを踏まえると、価値ある活動を創り出す生活科授業とは、思いや願いの実現に向かい、主体的に対象にかかわる活動と伝え合う・振り返る活動を往還しながら、対象や自分自身に対する気付きの質を高め、活動の意味や価値を実感し、自分の学習や生活への自信や意欲をもつことができる授業である。

## 2.2. 価値ある活動を創り出す生活科授業創造のポイント

上記のような授業像に迫るためには、「主体的に活動を連続・発展させる」「対象にかかわる活動と伝え合う・振り返る活動との主体的な往還を生み出す」「対象や自分自身に対する気付きの質を高める」という3点が重要となる。このことを踏まえて、次のような学習指導のポイントを基に授業創造していくこととする。

### 【ポイント1】自分事な思いや願いをもつことができる対象の設定

子どもが主体的に活動を連続・発展させるその原動力は、活動や対象に対する自分事な思いや願いをもつことが必要である。自分事な思いや願いとは、『〇〇で遊びたい。』『〇〇のことを知りたい。』というような、対象に自らかかわろうという思いや願いのことである。このような自分事な思いや願いをもつことができる対象の要件として次のように考える。

一つは、子どもにとって身近であり、そして、繰り返しかかわることができるものである。子どもにとって身近な存在であった対象を新たな視点で捉え直すことによって、『〇〇で、こんなこともできるんだ。〇〇って面白いな。また〇〇で遊びたいな。』と思いや願いが膨らむ。また、繰り返しかかわることで、対象に対する捉え直しが幾度も行われ、思いや願いが発展していく。二つは、これまでの経験を生かすことができる対象である。対象にかかわるとき、子どもは、これまでの経験で培った見方・考え方を生かしながら対象を捉えていく。つまり、これまでの経験の中でかかわってきた対象との関連性や系統性があることによって、子どもたちがもつ見方・考え方が発揮され、対象のよさに気付き、思いや願いが発展していく。三つは、発展性をもつ対象である。対象とかかわることによって生み出される活動が多様に想定でき、対象にかかわる活動の広がりや深まりが生まれることによって、『もっと、〇〇で遊びたいな。』『もっと、〇〇のこと知りたいな。』と思いや願いも広がっていく。

このような要件をもつ対象と出合い、かかわっていくことで、自分事な思いや願いが生まれ、そして、その思いや願いは連続・発展し、主体的に活動を創り出していく原動力となっていくものとする。

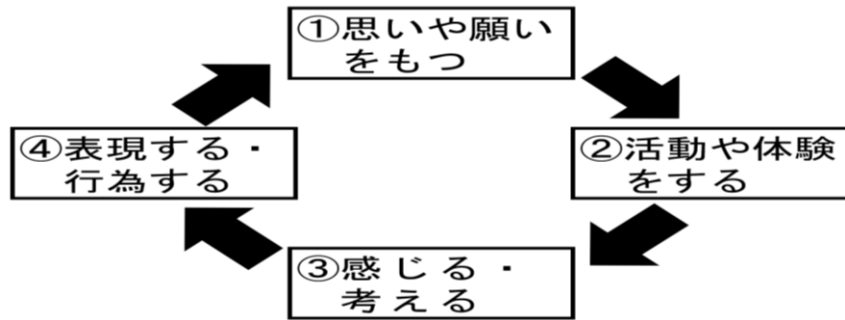


図1 生活科の学習過程イメージ

### 【ポイント2】子どもにとって物語性のある学びの道筋の想定

対象にかかわる活動と伝え合う・振り返る活動との主体的な往還を生み出すには、一人一人の子どもにとって、そこに学びの文脈が存在することが重要である。学びの文脈には、活動することに対する必要感が重要である。活動することに対する必要感とは、『(対象にかかわる活動)をすることで、・・・ができる。』『(伝え合う・振り返る活動)をすれば、～～が分かる。』というような思いをもつことである。活動に対する必要感を生み出すには、子どもにとって物語性のある活動設定・指導計画の作成が必要である。そのためには、次のような視点で、単元の指導計画を作成していくこととする。

他教科や学校行事等との関連といった子どもの生活とのつながりを意識した対象との出会いや活動設定を行う。また、子どもの思いや願いに寄り添いながら、必要に応じては指導計画を柔軟に練り直したりしながら、単元を進めていく。

### 【ポイント3】対象のよさや自分の成長を見付けたり自覚したりできる学習活動の設定

対象や自分自身に対する気付きの質を高めるためには、対象を捉える際に子どもが発揮する思考の方法を想定し、その思考を促すために必要な学習活動を設定することが必要である。その際、学習過程に応じて必要な学習活動を設定していくことも大切である。生活科の学習過程は、図1のように、自分の思いや願いをもち、具体的な活動や体験を行い、直接対象とかかわる中で感じたり考えたりしたことを表現し、行為していくプロセスである(図1)。このプロセスの中で、どのような場面でどのような方法で、対象や自分自身について気付いていくかを想定し、具体的な学習活動を設定していくこととする。具体的には、「③感じる・考える」場面で、「②活動や体験をする」際に気付いたことを自分と他者とで、時系列でといった視点を基に比較をしたり、関連付けたりするといった学習活動を通して、個別的な気付きから関係的な気付きへと、気付きの質を高めていく。また、「②活動や体験をする」場面において、友達と相互評価をするという活動を設定し、互いのよさを伝え合うとともに、伝え合ったことを基に自分の取組を振り返ることで、自分のよさや可能性に気付くことができると考える。

## 3. 価値ある活動を創り出す生活科授業の実際

### 3.1. 単元名

「大すき やぎさん」(第1学年)(11月実践単元)

### 3.2. 本単元のねらいと指導の立場

本単元では、諸感覚を働かせながら、進んでヤギと直接かかわったり、ヤギへのかかわり方について友達と協力しながら考えたりする活動を通して、ヤギも自分たちと同じ生命をもっていることに気付き、親しみをもって温かく優しい気持ちでヤギに適切なかかわり方ができるようになることをねらいとする。そのために、ヤギの様子をじっくりと観察したり、触れたりしながら、体の特徴や行動の様子に気付くとともに、気付いたことやこれまでの飼育経験、専門家からのアドバイス等を基にヤギの立場に立ちながらヤギとのかかわり方を考えていくことが大切である。

### 3.3. 子どもの実態

子どもたちは、これまでに学校の飼育舎にいるウサギの飼育活動を経験している。また、子どもによっては、家庭でメダカやハムスター、ネコ、犬などの小動物の飼育経験もある。それらの経験から、生き物と触れ合うことの楽しさを味わっていたり、生き物の立場に立ちながら、かかわり方について考えたりすることができるようになってきている。また、動物と触れ合う前後には手洗いやうがいをすることや、ウサギが嫌がるようなことはしない、ウサギには与えてはいけない食べ物がある等の適切なかかわり方についても理解している。さらに、ウサギの飼育に必要なアドバイスを飼育舎担当の教諭に求めたり、ウサギの飼育活動を通して気付いたことや分かったこと等を絵や言葉で表現したりする活動も経験しており、自分の体験を他者と交流する楽しさも感じている。

### 3.4. 本単元の目標

- (1) ヤギも自分たちと同じように生命をもって生きていることやヤギの気持ちを考えながらかかわることができた自分や友達の出組のよさに気付くとともに、手洗いやうがいなど、動物と触れ合った後の適切な習慣・技能を身に付けることができる。
- (2) これまでの経験やG Tのアドバイス、友達との交流を基に、ヤギの立場に立ちながらヤギへのかかわり方を考えたり、工夫したりすることができるとともに、ヤギと触れ合って嬉しかったことや気付いたことを絵や言葉で伝えることができる。
- (3) 『ヤギと仲良くなりたい』『ヤギが喜ぶことをしたい』という思いや願いを基に、自分から進んでヤギと触れ合う活動に取り組み、動物の気持ちを思いやりながら温かく優しい態度で動物と触れ合っていこうとする気持ちをもつことができる。

### 3.5. 本単元の授業創造のポイントの具体化

#### 【ポイント1】自分事な思いや願いをもつことができる対象の設定

本単元は、内容(7)「動植物の飼育栽培」を中心に構成した単元であり、中型動物であるヤギを学習対象とし、その飼育活動を設定した。

本校では生活科の活動をする際に、季節の変化を捉える活動を中心に隣接する大学構内での活動が多く設定されている。本単元での学習対象とするヤギは、大学構内で飼育されており、生活

科の活動で大学構内を散策する際によく見かけており、『あのヤギを近くで見たいな。』と、ヤギと触れ合うことに関心をもちやすく、また、繰り返しかかわることができる存在であると考えた。さらに、内容（7）に関連するこれまでの経験として、ウサギの飼育活動がある。ウサギとヤギのどちらも、子どもからの一方的なかかわりであれば、それを嫌がり、うまくかかわることができない難しさをもっているが、かかわり方によっては仲良く触れ合うことができる対象である。ウサギと触れ合う中で、ウサギが子どもたちを怖がり逃げ回ってしまい、うまく触れ合えなかったことも経験しており、ウサギの立場に立ったかかわり方の必要性に気づき、試行錯誤しながら、ウサギとの触れ合い方を見いだすことができている。このようなウサギとの触れ合いを想起し、比較したり、関連付けたりして、ヤギとのかかわり方を見いだすといった、これまでに培われた見方・考え方を生かしながら、主体的にかかわることができる対象であると考えた。

### 【ポイント2】子どもにとって物語性のある学びの道筋の想定

子どもにとっての物語性を重視するために、まずは、大学構内を散歩する活動を設定し、その活動の中で、ヤギと出会うことができるようにする。その場には、ヤギの飼育に詳しい大学の先生にも立ち会ってもらおう。なぜなら、初めての触れ合いでは、子どもたちもヤギへのかかわり方がよく分からず、うまくかかわることができないことが想定される。その際、ヤギと上手にかかわっている大学の先生の姿から、「あの先生に聞けば、ヤギと仲良くなれる方法が分かるかもしれない。」と活動の見通しをもつことができ、ヤギとの触れ合い方について考える、という活動へ発展すると考えたからである。次に、初めてのヤギとの触れ合いでうまくいかなかったことを基に、ヤギとのかかわり方について考える時間を設定する。ここでは、GTとして初めての触れ合いの際にもらった大学の先生にアドバイスをもらったり、これまでの経験を想起したりしながら、ヤギとの適切なかかわり方について考えることができるようにする。そして、考えたことを基に、再びヤギと触れ合う活動を設定する。2回目の触れ合いの際にも、大学の先生に参加してもらい、ヤギと触れ合う活動中にも、困ったことがあればすぐに相談することができるようにする。そうすることで、よりよいかかわり方について主体的に試行錯誤する姿を引き出すことができると考えたからである。ここまでを踏まえ、図2のように、ヤギに直接かかわりたくなる、かかわり方を考えたくなる、考えたこと・見いだしたことを試してみたいくなる、そのような道筋で、単元の活動の順序を設定していくこととした（図2）。

### 【ポイント3】対象のよさや自分の成長を見付けたり自覚したりできる学習活動の設定

本単元では、これまでの経験（ウサギの飼育活動）とヤギの飼育活動を比較しながら、その共通点や差異点からヤギとの適切なかかわりを見いだすことが有効であると考えた。また、困ったことや解決したいことについてGTからのアドバイスを関連付けながら適切なかかわり方を考えることも有効であると考えた。そこで、このような思考活動を促すために、「ウサギさんと仲良くなれたのはどうしてなのかな。」「どうしてヤギさんだと、ウサギさんのように近づくことができないのかな。」「～～なときには、どうすればいいのかな。」というように問いかけながら、ヤギとのかかわり方を見いだすことができるようにすることとした。

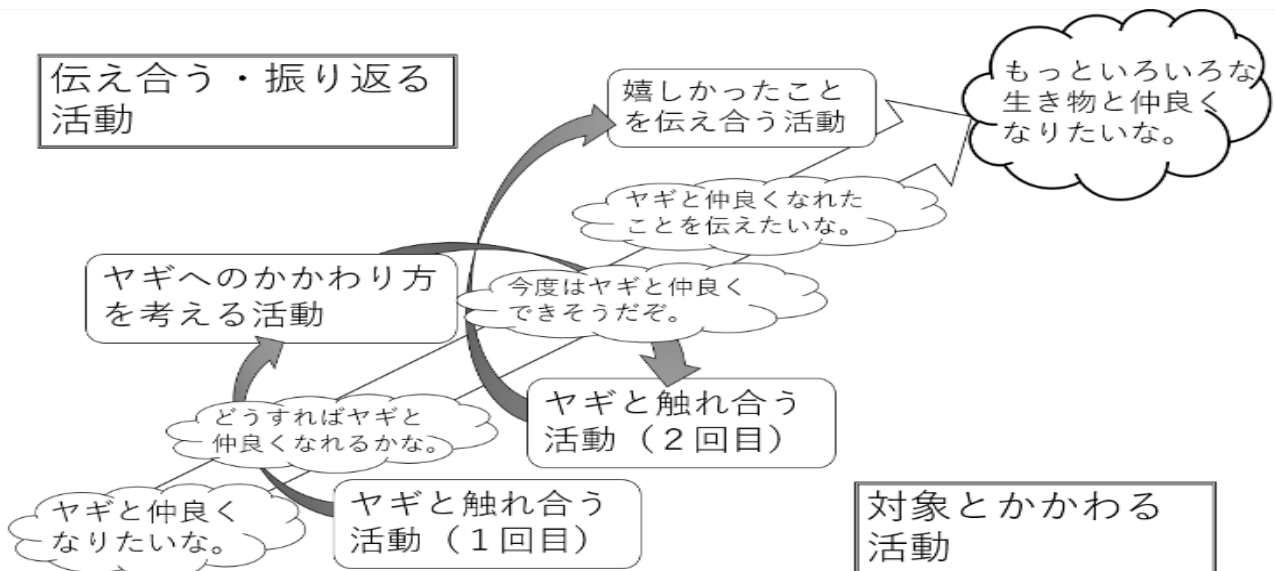


図2 単元「大すき やぎさん」学びの道筋イメージ

また、自分の成長を自覚することができるようにするために、活動の節目で、その時の自分の気持ちを文章で書くワークシートを使って振り返りをする事とした。そして、単元の終末では、そのワークシートを基に、ヤギに対する自分の気持ちの変容を子ども自身が見取ることができるようにし、自分自身の成長を自覚することができるようにすることとした。

### 3.6. 単元の指導計画 (全5時間)

第1次 「こんにちは ヤギさん」：ヤギと触れ合い、気付いたことを伝え合う。(2時間)

第2次 「ヤギさんとなかよくなろう」：ヤギと仲良くなる作戦を立てて触れ合う。(2時間)

第3次 「ありがとう ヤギさん」：これまでの活動を振り返り、気付いたことや感じたことなどを伝え合う。(1時間)

### 3.7. 単元の実際

#### 3.7.1. 第1次「こんにちは ヤギさん」の実際

前単元を振り返りながら、大学にいたヤギの話題を出し、「アンちゃん(大学のヤギの名称)に会いに行ってみよう。」というところから単元がスタートした。触れ合う前には、「やったあ。アンちゃんと遊びたいな。」と意欲的であったが、ヤギの近くまで行ってみると、ヤギが逃げ回ってしまいなかなか近寄ることができなかつたり、急に走り出すヤギに戸惑ったりする子どもの姿があった。また、ヤギの体の大きさや角等の特徴に気付いたことで、「なんか怖いし、仲良くなりたくない。」と、ヤギと触れ合うことに消極的になっていた子どももいた(写真1)。

1回目のヤギとの触れ合いについて振り返る中で、「またアンちゃんに会いに行きたい。」という子どもがいる一方で、半数近くの子が「アンちゃんは逃げ回るし、もうアンちゃんとは遊びたくない。」「なんか怖いから、嫌だ。」と言い出し始め、アンちゃんともう一度触れ合いたいという子どもたちとの対立が生まれた。そこで、アンちゃんともう一度触れ合いをするか子どもたちに自由



写真1 ヤギと触れ合う子どもたち



写真2 GTに教わりながらヤギに触る子ども

に意見を交換させた。「ウサギの時も、最初は逃げられたけど、優しくそおっと近づいたり、野菜をあげたりしたら、仲良くなれたから、アンちゃんとも仲良くなれると思う。」と、ウサギの飼育活動を生かせないかと考える姿が見られた一方で、「アンちゃんは、ウサギよりも体がすごく大きいし、私たちが怪我をしてしまうかもしれないから、(触れ合いは) やめた方がいい。」といった意見が出された。そんな中、子どもたちに「ヤギの近くに大人の人がいなかった？」と問いかけると、「そういえば、ヤギの触り方を教えてくれた大学の先生がいた。」「あの先生の隣ではアンちゃんはおとなしかった。」と、大学の先生の存在を思い出し、「あの先生に仲良くなる方法を聞いてみたらいいんじゃないかな。」「ウサギのときみたいに作戦を立てたらうまくいくかもしれないよ。」とこれまでの経験も想起しながら、解決の見通しをもつ子どもが出始めた(写真2)。これによって、触れ合うことに反対だった子どもたちも納得し、ヤギの飼育をしているウサギの時のように作戦を立ててもう一度ヤギとの触れ合い活動を行うことが決まった。

第1次「こんにちは ヤギさん」の活動を振り返ったワークシートに見られた子どもの主な記述は、以下の表1のとおりである(表1)。

### 3.7.2. 第2次「ヤギさんとなかよくなるろう」の実際

1回目の触れ合いでうまくいかなかったことを解決し、2回目の触れ合いを成功させるために、作戦会議を立てることにした。「アンちゃんに詳しい先生にも教えてほしい。」という子どもたちの願

表1 「こんにちは ヤギさん」活動後の子どもの振り返り

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>○ なかよくなれるかドキドキしていたけど、アンちゃんとは、なかよくなれないとおもった。</li> <li>○ はやくアンちゃんともだちになりたい。</li> <li>○ アンちゃんとはあまりなかよくなれなくて、かなしかった。</li> <li>○ アンちゃんとあえたのはうれしかったけど、だいじょうぶかな。</li> <li>○ すこしだけなかよくなれたから、またあいたいな。</li> <li>○ こわかった。びっくりした。ふるえちゃってさわれなかった。</li> <li>○ すこしだけなれたけど、まだふあんだな。</li> <li>○ あまりなかよくなれなかったけど、つぎはなかよくなりたい。</li> <li>○ いくまえは、たのしみだったけど、なかよくなれなくてたのしくなかった。</li> <li>○ ちょっとこわいけど、つぎは、さわってみようかな。</li> <li>○ アンちゃんのことをもっとしりたいなとおもった。</li> </ul> |
|--|



写真3 GTと一緒に作戦を話し合う様子



写真4 持参した野菜をヤギに与える子ども

いを基に、ゲストティーチャーとして、大学の先生にも話し合いに参加してもらった（写真3）。

まずは、解決したいことについて、ゲストティーチャーに質問する活動を設定した。「アンちゃんはどうなことをされたら喜びますか。」「アンちゃんが好きなエサは何ですか。」等と、積極的にゲストティーチャーに質問する姿が見られた。その後、グループごとに、2回目の触れ合いに向けて、やりたいことや必要な準備等について話し合う活動を設定した。「アンちゃんは『お散歩するのが好き。』って言っていたから、私たちのグループはお散歩をしよう。」「アンちゃんは、『野菜の葉っぱが好き』って言っていたから、お母さんに野菜の葉っぱをもらって持ってこよう。」と、ヤギとの触れ合いでやりたいことを具体的に見いだすことができていた。話し合い活動後の子どもの振り返りの記述は、表2のとおりである（表2）。

2回目の触れ合いの際にも、大学の先生に参加してもらい、活動中にも、困ったことがあれば、すぐに聞いたり、アドバイスをもらったりしながら、自分たちが立てた作戦を試す姿が見られた。家から持参した野菜をヤギが食べてくれたり、1回目は逃げられてしまいうまくかわることができなかったヤギと一緒に散歩することができたりしたことに満足し、喜んでいる姿が見られた（写真4）。また、ヤギとの触れ合いが深まったことによって、「アンちゃんは、体に全部毛が生えているね。まつげがあるのは、人間と一緒にだよ。」「アンちゃんも私たちみたいに、かゆいところを前足で掻いていたよ。」「ぼくが優しく頭をなでたら、なんか嬉しそうにしていたよ。ぼくと同じだね。」「前は逃げたのに、今日はアンちゃんが逃げないよ。友達だと思っているのかな。」と、ヤギの様子と自分たちとを比べながら、ヤギへの気付きを深めている姿が見られた。ヤギとの2回目の触れ合い活動後の振り返りの記述は、表3のとおりである。

表2 作戦会議についての話し合い活動後の子どもの振り返り

- アンちゃんにさわれそうなきもちができた。
- ほんとうになかよくなれるのかな、まだすこししんばいだな。
- さくせんかいぎのまえは、なかよくなれるかな、ってしんばいでした。でも、こころがうごかされて「やろう。」っておもいました。
- なにをしようかまよったけど、プレゼントをあげることにしました。なにをあげるかという、クローバーです。アンちゃんにあうのがたのしみです。
- あさのせんせい（GT）は、アンちゃんのことをなんでもしっていてすごいな、とおもった。



表3 ヤギとの2回目の触れ合い活動後の子どもの振り返り

- アンちゃんとなかよくなれた。なかよくなれてうれしかった。
- さくせんがせいこうできてとてもうれしかったです。つぎもまた、さわってみたいです。
- 「やったあ。」とおもいました。さくせんせいこうだ。
- あさのせんせいにおしえてもらったことをやったらなかよくなれた。
- アンちゃんともだちになったよ。
- アンちゃんは、人とちがうところとにしているところがあることがわかった。
- アンちゃんは、子どもがにがてだったのに、エサをあげたらなかよくなれてうれしかった。

### 3.7.3. 第3次「ありがとう ヤギさん」の実際

最後に、これまでの活動を振り返る活動を設定した。振り返る際には、活動の様子を撮影した写真やこれまでの活動ごとに行ってきた自分の振り返りのワークシートの記述を基に、振り返りを行った。

子どもたちは、これまでのワークシートの記述を見直しながら、それぞれの活動を通して自分の思いや気づきが変わっていることを自覚的に捉えていた。また、「はじめは、うまくいかなかったのに、2回目の触れ合いでは仲良くなれたのはどうしてだろう。」と問いかけたことで、「アンちゃんのことを考えて作戦を立てることができたから。」「浅野先生（GT）に分からないことを聞いて教えてもらったり、アンちゃんのために野菜を準備したりしたから。」と、自分たちの取り組み方のよさを自覚的に捉えていた。活動の通した自分の成長に気付いたことによって、「他の学級の友達にもアンちゃんと仲良くなる方法を教えてあげたい。」「もっといろいろな生き物と仲良くなりたい。」とこれからの活動に対しての意欲をもつことができていた。本単元の活動全体を振り返った後の子どものワークシートに見られた記述は表4のとおりである（表4）。

表4 「ありがとう ヤギさん」の活動における子どものワークシートの記述

- アンちゃんは、こわいかなとおもっていたけど、がんばってさわってみたら、さわられたので、うれしかったよ。アンちゃんのは（歯）は、おもしろいかたちをしていたよ。どうやってたべているんだろう。もっともっとアンちゃんのことをしりたいな。
- さくせんをたてて、やることをやってみたらせいこうできて、とてもうれしかったです。さくせんをたてることは、いいことなんだなとわかりました。みんながアンちゃんとなかよくなれたので、うれしいです。
- アンちゃんとふれあってみて、さいしょはちょっとこわかったけど、ちゃんとさくせんをたてて、やさしくしたら、アンちゃんとなかよくなりました。アンちゃんもやさしくされたから、うれしかったんだとおもいます。これからも、いろいろないきものとなかよくなりたいです。
- さいしょは、どうやってアンちゃんとなかよくなるのかわからなかったけど、あさのせんせいにおしえてもらったら、アンちゃんとなかよくなりました。あさのせんせいはすごいな、とおもいました。ぼくも、あさのせんせいみたいなおとなになりたいです。

#### 4. 実際の考察

3つの授業づくりのポイントを基に単元を構想してみたことによって、「アンちゃん(ヤギ)と仲良くなりたい。」といった自分事な思いや願いをもちながら、活動に没頭し、「アンちゃんと私は似ているところがある。」「アンちゃんと仲良くなれたのは、私が優しい気持ちをもっているからだ。」とヤギや自分自身に対する気付きを深め、主体的・能動的に価値ある活動を創り出していく姿を引き出すことができた。また、これまでに培った見方・考え方、経験を基に、試行錯誤しながら活動していく姿も見られた。単元を通した子どもの変容から、「アンちゃんと遊ぶと楽しいな。」というヤギと触れ合うことのよさや、「作戦を立ててみることはいいことだな。」と思いや願いを実現するために試行錯誤することのよさといった、活動することの意味や価値を実感することができていた。このような子どもたちの姿から、本実践を通して、自分の生活を豊かなものにしていくことができる資質・能力の一端を育むことができたと考える。

本実践を振り返る中で、活動中の子どもの発言や子どもたちのワークシートの記述を見てみると、「困ったことがあったときには、詳しい人に尋ねてみるといい。」という学び方を身に付けている姿や、「GTみたいな大人になりたい。」という憧れをもっている姿が見られた。今後は、子どもの学びの可能性を広げる存在として対象の設定だけでなく、ゲストティーチャーのあり方についても検証してみたい。

#### 5. おわりに

生活科の学習の中で、「為すことによって学ぶ」ことを具現化していくためには、活動に対する子どもの主体性を引き出し、そして、発揮できる活動を設定することが何よりも大切であるという、生活科が創設期以来大切にしてきた考え方の重要性を改めて実感することができた。今後も、子どもの学びの文脈を大切にしながら、生活科の究極の目標である「自立し生活を豊かにしていく」ことに向かう資質・能力の育成を目指し、生活科の真の学びを追究していきたい。

#### 付記

本報告は、鹿児島大学教育学部附属小学校令和元年度研究紀要で発表した研究内容に基づき、本校生活科において研究をさらに発展させ、その研究成果をまとめたものである。

#### 引用文献

- 鹿児島大学教育学部附属小学校 (2019). 新たな価値を創り出す資質・能力を育む授業の創造  
 文部科学省 (2018a). 小学校学習指導要領解説生活編 東洋館出版  
 文部科学省 (2018b). 小学校学習指導要領解説総則編 東洋館出版